
されど咎人は空を睨む

蒼凪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

されど咎人は空を睨む

【Zコード】

Z333301

【作者名】

蒼風

【あらすじ】

墮ちた天使は悪魔と呼ばれ

欲と罪にまみれながら誘惑のダンスを舞う。

だが、無垢なる願いは悪と呼ぶのか？

それすらわからぬまま 少女は剣を振るつ。

共に歩むべき 少年と共に。

普通の高校生だった隆聖。

ちょっと変な友人と日常を過ごしていた彼は、突然に非日常に巻き込まれる。

それは、人外の化生との戦いの始まりでもあった。

せじまつは突然に

いつも感じてこる「J」と。

Jの世界はなんて退屈で残酷で矛盾に満ちているのだらう?
難しこことはわからぬにかど、でも、みんながみんな希望を持つ
ている訳じやなくて。

何をしていいのかわからなくて、でも、何かしなくちゃいけなく
て、そんな焦燥感をみんな抱えてるんじやないだらうか?

Jの世界から消えてしまいたい、Jの世界をぶつけにわしたい。

それは普通の感情じやないのだらうか?

みんな、理性とか優しさとか感いとか、そんなもんでき止め
てるだけで、僕らの内側には獸が隠されてて、いつも自由にならう
と暴れてる。

Jの世界から抜け出したいと、そんな風に想いながら。

「おはよっす~」

すたまじこ大あくびを隠そりともせず、僕は扉を開けた。

部屋の中から返されるおはよつの大合唱。

所々に馬鹿にしたような笑いが込められてるのは「愛敬」。

・・・・さきしょ、後でしめてくれる。

僕のやさぐれた想いに気づきもせず、笑いを顔に貼り付けながら、友人といつか悪友といつか腐れ縁の友春が近づいてきた。

チヒシャ猫のような笑いを童顔に浮かべているところが、似合わなくはないがなんかむかついてくる。

「おはよつ、隆聖つてげふええええ

蛙のよつな・・・つて、さつきから動物にたとえてばかりいるな・
・・・悲鳴を上げながら吹つ飛ぶ18才の男。

「なんだ言つたらわかりやがる、僕の名前はリュウセイじやなくて、タカマサだつ。どこのお空にながれてるもんみたいに願いなんてかなえなにつつーの」

「み、みんな言つてるからいいじゃないか。なんで俺だけ踊るんだよ」

「ん? むかつくか?」

「なんじやそりやあああああ

「の世の不幸を全てその身に受けたような顔で叫ぶ、佐伯友春、

彼女いない歴・年齢だった男。

黙つていればもてるんじゃないかと思われるが、この、真性ギャグメーカーはかつこつけてもおもしろくなってしまうのである。

不幸だとは思うが、かわいそつだとは思わない。

だつて、友春だし。

ムンクの叫びのように顔を変形させた友春をほつときつ、自分の席にバッグを置いていると、後ろから声がかけられた。

「相変わらず仲がいいね～」

クスクスと楽しそうに笑う少女の名は高木明日香。

背が小さくてかわいくて守つてあげたくなる外見に反し、思いつきり姉御肌で、知らないで近づく男どもを屍の山に突き落としている女だ。

そして、友春の彼女もある。

一人がどうしてつきあつようになったのかはこの学校、私立高天原高校の七不思議の一つとして認定されているらしい、いや、まじで。

一人でいると、一瞬ほのぼのとした雰囲気を感じるのに、血まみれで凄惨な光景を目にすることになるのも七不思議の要因の一つなのだ。

まあ、恋つちやあわけわからんもんだからなあ・・とわかつたよう

に一人納得していると、しばらくぼんやりしてた僕の頭を何かが

直撃した。

涙目で口を開けると、笑顔の明日香。

その握られた拳には、若干の煙と、ほんのりと紅に色づけられた

液体。

「それ・・・僕の血なのでしょうか？お嬢様・・・」

「ん？何か言つた？」

「ナンデモアリマセン、HH、HH」

機械仕掛けの人形のようにカクカクした動きを見せながら、彼女

に向き直る僕。

我ながら情けないが、しかたない。

だつて、怖いし。

「まったく、人の話を聞かないからこうなるんだよ？で、どこま

できいてた？」

「まったくきいてませんでした、すみませんごめんなさいゆるし

てください」

しかたないなあ、と深い深いため息をついた明日香は、僕に問いかける。

「今日、転校生が来るって知ってる？」

「いや、知らないなあ」

「ほんとに、そういう情報に疎いよね。みんな、この話で持しきりなのに」

やれやれともう一度ため息をつく少女。

だって、しかたないじゃないか、いままたばっかりだし……といつ反応はやめておく。

だって、怖いし。

「ん？でも、どうしてそんなんで話題になるんだ？？別に、そんなに不思議じゃないだろ？転校生ってだけなら」

この学校は新設校なので、頻繁にではないにしろ、それなりに転人生がやってくる。

自由な校風と、進学校という要因が重なる上、芸術系の授業に置いても著名な講師を招いてたりするからだ。

将来の選択肢が広がる、といつ点では魅力があるのだろ？。

「今回ばかりはちがうんだなあ、いつもとは」

そういうて死角からやってきた友春。ムンクから復活したらしく
・敵ながらあっぱれである。

「今度転入してくるのは、なんと女の子。しかも、めっちゃ美人らしげふう！」

星辰の彼方まで吹き飛ぶ友春。

拳を突き出した体勢で固まっている明日香。

「他の子に対して美人とか言つと、彼女に怒られるんだよ、普通は？」

「あ～、かつこつけてるところ悪いんだけど・・・友春、落ちたぞ、窓突き破つて、外に」

大きな穴があいた窓ガラス。

粉々に粉碎されたその光景を見ながら、僕自身もため息をついた。

そんなこんなで始まるHR。

このあと、美人の転入生とかの紹介があつて、おきまりの歓声と委員長の制止の声があつたりして、なんだかわけわからんまま授業に突入するんだろうなあ・・・とか思つてた。

・・・・・・・・・そう、この瞬間までは。

突然わき上がる悪寒。

本能的に全身の毛が逆立つ。

その理由を確かめる前に、あり得ないことが起きた。

突き破られたままだつた窓から誰にも気づかれないうちに迷い込んだスズメが、いきなり大声で叫んだのだ。

しゃがれた老人の声で、呪詛の言葉を。

「なにもわからず、なにも考えず、ただ享樂とした人生を謳歌する愚者どもよ。呪われろ詛われろノロワレローー！」

その叫びかなにか理解するより早く、
変化は起きた。

それは、静かなものだつた。

音さえも立てず、姿が変わつていく・・・それは脱皮のよつでもあつ、変態のよつでもあつた・・・異形へと。

誰も話せなかつた。

誰も話す！」となんてでもしゃしなかつた。

恐怖、放心、疑問。

そんな感情が、心の隙間からにじり寄つてくる。

誰かが手にしたペンを床に落とし、その小さな音が教室いっぱいに響き渡ったとき・・・その感情は、一気に爆ぜた。

誰かが騒ぎ出す。

そして、それをきっかけにして、みんなが我先にへと出口へと殺到する。

パニックになりかけた教室。

だが、異常は続く。

時が、止まった。

友人を押しのけようとした男子の手が、突き飛ばされ転がる直前の女子が、その場で制止した。

動くものは、いの空間になかつた・・・先ほど怪物と、自分以外には。

「な、なんで・・・? ? ?」

化け物がいるのか？みんなが動かなくなつたのか？そして、自分が動けるのか？

その中の何が聞きたかったのだ？？もしかしたら、その全てなのかもしない。

パニックに陥りかけた僕が、正気を失わなかつたのは、廊下から響いてきた靴音のおかげだった。

静かに、ゆっくりとした足取りで、その足音は近づいてくる。

そして、僕たちの教室の前で、不意に止まつた。

僕の視線はその先に向かつ。

化け物のよどんだ黒い瞳も、その先へと向かつ。

そして、一つの視線が伸びた先には・・・少女の姿があつた。

少女・・・といつのは、間違いなのかも知れない。

妖艶な娼婦にも、戦場に立つ戦士にも、あどけない少女にも見えるその女は、化け物を一別すると、小声で何かを呟いた。

その瞬間、新たな変化が起こる。

彼女の背に、翼が広がる。

闇のよつな、深い深い漆黒の翼。

その翼が開ききったとき、化け物は叫んだ。

「我が同胞よ？何故に我に立ちふさがる？欲望を糧にして、天を恨み、地を這いしものの宿命から何故逃れようとする？否、断じて逃れることなど出来ぬ。欲のままに啜り、欲のままに滅びを撒くのが我らの道理」

しゃがれた老人の声。その声に対するは凜としたそや。

「逃れよつとはしてない。ただ、私の願いのままに歩んでいるだ

け

くつくつくつとひしゃげた笑い声が、止まる時の中でも鳴り響く。

「ならば、我が欲と汝の欲、どちらが強いものか競おうではないか。賭けるものは自らの命。くくつ、だが、我が滅びもまた我が願いなり。結末はどうぞよろしく」

嘲りの声に耳も貸さず、少女はその漆黒の翼を一、二度震わせた。

その音が合図であるかのように、動きが起る。

そして、それは、僕自身が踏み込んだ、非日常の世界への合図でもあったんだ。

はじまりは突然に（後書き）

プロジェクトも作りなごま勢いではじめてしまった……（…）

なんか破綻しない物語を作つていいかと思ひます。
読んでもらえると嬉しいですわあ

傷つく覚悟

幼い頃、夢を見た。

自分がヒーローになつて、悪と戦い、勝利する光景。

みんなを守りたくて、みんなに褒められたくて、叶うはずのない夢を追い、テレビに釘付けになった。

大人になつて、それが作り物だと知つて、人生そんなもんだった
笑い飛ばしながら生きてきた。

だけど、それが現実になつて。

悪者は、怪物は、いるんだって思い知らされて……。

「だけど、こりゃないでしょ、神様……」

思わず天に召します神様に深い深いため息を送りながら、僕は天
を仰いだ。

僕の目の前では、相変わらずひろいふあんたじ～な光景が広
がっている。

翼を翻し、手にした漆黒の刃を振るう美少女。

その剣戟をかいぐぐり、少女の柔肌に牙を突き立てようとする異

形の化け物。

そして、それを遠くからへたり込んで眺める僕。

かなり異質で、でも、かなり間抜けな光景がそこには広がっていた。

最初の頃に襲ってきたのはパニック。

そして、恐怖。

だけど、あまりにもわけわからなすぎて、現実離れしそうで、なんだか落ち着いてきちゃったのも事実で。

まるでテレビの特撮もの見てる感覚で見てただけど、これがまた、すぐ綺麗だった。

異形、異形つていいまくつてるけど、実際、化け物には精緻なCGを目の当たりにしているような感動があつたり。

それに対する女の子は、もう、美少女でかっこよくて綺麗で、なんていうか、萌え?ってかんじで。

それはもう、よくできた映画を見るような状況で眺めてたわけですよ・・・そう、それが起ころるまでは。

時間が止まつたかのように動かない教室の中、その中に残された生徒はあまりいなかつたけど、それでも逃げ遅れた何人かは必死の形相でとまつてて。

彫刻みたいだなあと余裕をかましてたら、化け物が跳ね飛ばした机が、たまたま僕の隣にいた友春の顔にぶち当たった。

飛び散る鼻血。

ちょっとへこむ鼻の頭。

うわ、すっげえあほつぽいなあ・・・なんて笑いかけた僕の表情がそこで止まった。

鼻血・・・・?

血の気がひいた。

今まで動かなかつたから意識してなかつたけど、もとは僕の友人たちだ。

それが傷つけられるつてことは、死ぬ可能性もあるつてこと・・・か?

膝が震える。

急速に現実感が襲いつ。

拳を打ち込んで無理矢理足の震えを止めよつとしていた僕の目に、

それは映つた。

舞うようなステップで獣の攻撃をかわす少女。

その空けられた空間の先には・・・明日香がいた。

必死の表情で出口に向かう途中の、明日香がいたんだ。

叫びは出なかつた。

のどがひりひりと痛んで、声なんてなにも出でこなかつた。

立ち上がる。

走り出す。

いつも何気なくやつてる行動が、ひどくひどく緩慢で、もどかしくて、くやしくて、僕はただ見ることだけしかできなくて。

全ての神様に、どつかにいる仏様たちに祈りながら、でも、それでも届かなくて。

絶望が襲いかかって・・・でも、そのとき、とんつって軽い音がした。

反射的に閉じかけた瞳を向けると、明日香のことを突き飛ばす少女がいた。

救われた・・・そんな安心感はなかつたよ。

だつて、目の前の少女に獣が迫つてたんだから。

無表情の少女の顔に、焦燥と、安堵と、あきらめが浮かんだんだから。

・・・・・ふむけんな、つておもつた。

自分の田の前にあるわけわからん状況にも。

田の前で諦めかけてる、名前も知らん女にも。

なによりも、なんもできやがらない自分自身に。

「ひやけんなあ！..」

今まで出なかつたとは思えないほど大きな声が自分のどから絞り出されて、自分の体がものすごく軽く感じられて。

気がついたら、吹っ飛んでた。

痛みはなかつた。

それ以上に、怒りがあつたから。

だから、自分の腹を食いちぎつてる奴の頭を思いつきつつかんで、驚いた顔をしてる少女を思いつきりにらみつけた。

憎しみなんかじゃない。

その子に対する憎しみなんて、あるわけがない。

いまはただ、とにかく、みんなを傷つけようとして、自分自身を傷つけたこいつをぶつ飛ばしたかった。

だから、痛かつたけど、苦しかつたけど、彼女がもつっていた刃で

この化け物を切り裂いたとき、笑うことが出来たんだ。

酷く眠かった。

自分の下にたまつた水たまりが冷たかった。

でも、なんかは出来たかなって満足はあつたんだよ。

そして聞こえた。

「生きたい？」

僕は答えた。

「生きたい」

光が、生まれた。

傷つく覚悟（後書き）

とつあえず、あらかじめ書いてあつた一話分を公開。
この先がんばります

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3330i/>

されど咎人は空を睨む

2010年10月9日03時06分発行